五十年前に親たち教育法の良き為に
二十五歳と未だ若い其二

第一年の十月で立ち山となられ三代目宮村田
助が、江戸の宇田川屋で、彼の為に書きか
ちされた、あのセンセショナルな「切られお富」を上
演して、当都の別者を熱狂せしめられた

一段

二頁

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

五十年前に記した物語の原稿が、
二十五年ぶりに出版された。
（嘉永元年）
第一幕（年の十月で立ち山ともなった三代目河竹
新七助が、江戸宇田川町で、彼の為に書きか
つされた、ありのセンセーショナルな「切られお富」を上
演して、当都の劇者を熱狂せしめかれた元
治元年は（西暦一八六四年）維新の大変動の、しかも二幕
目ともいうべき年であった。
すなわち、長州
征伐の年であり、象山先生が斬られた年で
あり、英米蘭仏の軍艦が兵庫沖に碇泊した
年であった。九歳も
まだ甚平は二十歳の若盛
りで、田舎助のお富、詐欺の與三郎、芝居の
赤間源左衛門を同じ一週で、幡安を動か
した評を博した。
（九歳が三十歳）
例の明治に監獄に
役者評判記は、延宝、貞享の盛を加えて
元禄以後は、殆ど聊かの変化もなく、浮き沈
と動き、文人の書き出せば云れつけて来て
ゆくのであったが、元治以後となって、さすが
に芝居の狂乱浪に陥ぬされかけると見え
て、元治元年に一種、そ
れ以後に一種、それッきりで
全く乱世域が絶えてしまったから、しかも元治
二年の『役者稽古鏡』が早大図書館に在った
ので、当時の劇評を押して見よう。

全く乳域が絶えてしまつたらしいが、[illegible]元治
二年の『役者稚児鏡』が早大図書館に在つた
と考えに、當時の九彩評を引用して見よう。
(頭取)三河屋丈うの御子息三猿丈でございま
す、此お人はとんと人乳が薄らぎ、用心
方もわるくこざりますが、富春狂言が
ちめきく直ちがあります(評者)いや又、
先年見た時とは大ちがい、金門に眞味人
次、短軍者うお土竹は宜しうこざります
た(芝居好)二番目『浮石の横櫛』に下人

安兵、お富に横恋慕して殺す、郎丈の海杭
の松と駒丸合入、お富に恋慕ける所め
つさりとこざりました(ちんば)第一す
つはりと地雷は、さして持物から拵一
に凝つてをつると見えて、當世風の江
戸土産、姉でこざりました(見功者)後、
塩梅あとなつてお富と夫婦と成り、宇津
谷峠の記主居、五ヶ月代にて内室場の法
被一枚で戻つて来るところ、其思はくが
よつぽどよく、お富といい云せ、赤

間屋、ゆすりに来る[illegible]、直参者とし
地金をあさり、手軽いお土竹、かんかん
(評者)後、霊寿と墓番と捻鬼の道具に
て、出も助丈しの立回り……此位置に
ては、お富が立て役で次が此安の役でこ

年

地位を考さず、手軽いお話、かんかん〜
（評者）後、戯曲と墨書と感想の道具に
て、田も助丈しの立回り……此作品に
ては、お富が立て役で次が此安の役でこ
ざりまして、亦丈は色立役には回
きかわるいが、今に權ちやーちゃこては、
さてよろしつてと存ります、云と
其頃の花は、とてもかくも門のあでやかつて上
に、園がもまだ 現在 車であつてから、隨方、
大正日

年

勞力好第で、時の為指の新說車と競爭して、
中央劇壇で雄を稱することも出来さうに見
えた。とゝろは、政治の大事件がガンドウ返し
にナリかけてゐるとおなじく、劇界の樣運も、
元治の慶應つゞけては、少くとも劇界謝
の目出の結果として招致さる一種の事動と亘
ゝあつたのである。關三が先い、國元の
我が先い、先切 小國沢、ひとり光り、少
なくとも江戸の三座は、俳に一時は別を文持しよ
ゝとゝあるかの如く見えたのである。さゝ

してさゝいの使命を帶んでゐる新進新說
の花い役者ゝもたゝ毎に必ず第一人
りられこのもの。
為に抽入した四種の役者絡のもので
双六は假名垣魯文の作で、慶應二年（西暦一八六六年）出版
他の「四十八癖」と題したは出版年月は
明治ガ共に國周の絵入時の筆であり、筆者

双六」は假名垣魯文の作で、慶應三年出版、他の「四十八癖」と照らせば、出版年月は、明らかに共に國周の若い時の筆であるから、筆者と役者の様子とから推して、同年か翌年と推定することが出来ようが、ほぼこれらにより、も、九郎の當年の位置が想像される。「双六」で

は九郎は芝翫の家紋を用ひて河原崎權十郎（九代目團十郎）や尾上菊五郎（七代目團十郎）に追ひすがりあせつてゐる。

「桜の花」のは、に、萬事には省いてがな頼の上部に、絵金陣と簡略な評とが添つてあつて、小團次が十兩、芝翫（三代目團十郎）が十兩、田三助が十兩、京三郎が十兩、京橋（五代目菊五郎）が九百五十兩、河原崎權十郎（九代目）が九百兩、福助が八百兩、九郎が八百兩ときつてゐる。

因みに、元治元年より四年前（三）文久元年出版の「役者讀年に時の絵者と「大切記十段目の文句によつて見立てさ〜して絵金陣をしてゐるのを見ると、それは芝翫を「威風堂々たる」と評して九百廿兩、第三郎（紫若）九代目中村團十郎を「擬の読易きを」と評して同上、權十郎（九代目）と「目に物見せてくれんかと」して八百八十兩、田三助を「十八番が其向」として六百十兩、九郎を「盗方が牛角切

（慶三年即）

9

……道……

権十郎（九代目）と「目に物見せてくれん」と

して八百八十両、団三郎を「十八番が其向」

として六百少千両、九蔵を「臨方か手柄功

10

名づけて七百両と附けてある。此によると、

団三郎は其後四年の間に九蔵も権十郎をも

凌駕したものらしい。

我が二種の役者絵「花競勝業」と「石亭諸

書」の作は出版年月は分らないが

芳幾の筆らしく、（明治元年）以前のもの

であらう。前者では、九蔵は、向って右の端の

石段で、権十郎を上めてゐる。家橘（五代目菊五郎）の

右の脚を引張って、上らせまいとしてゐる。其

詞書に

11

6 二字下り

二人の家には脚も付いてない。石段に

お互い團扇の傘を、あんまり安くされちゃア

叶はねえ。贔屓々々は別にして、腕

をくらべて貰ひたい。

又「石亭諸道」では、向って左側の降り坂を大

勢の役者連が降りて行く中に、九蔵の父の團

蔵も、ついて関三十郎の父の亀蔵も或

は早くも降りようかと思ってゐるらしいところへ、大

肌ぬぎの向う鉢巻で、勢ひ切って攀ぢ登らうと

してゐるのが九蔵である。さうして其詞書に

は斯うある。

明治の初年詩歌で、軍歌ひろつて樂しむやうとしてゐるのがれである。さて其詞書に

は斯りある。

（二字下り）

（俗字）

（俗字）

（其演十八九歳）

（其演三十四五歳）

國へおれは陣りやめて、卒、を前は陣ちねえやつに參らがしてえ。

九へお父さん、奉しやさんな、ちつと運かつちが、言つて骨とおりやア頂上まで登るは言う間だよ、おらが事は氣を揃まずに、さつさと陣しねえよ。

此岡中、市川新車は、もう虚空はるかに大夫駒にひつさらはれてもり、田助はまた筆な前髪の樹に、事業井筆三郎（其演）う

立伸つてゐる大山の中腹、もうすぐに追ひくほどに參つてゐるが、そこ一刹ばかりの中村桃三にとけたらしい一個の暴高にとやらそして事誘惑されかけたらしく、新つ気ちそして事にすると、一体みさせる迄時をしてゐる。其歩し下の左りは近道、右は女坂。此二ケ所では若手車の大競爭。丘道でも家橋（五代目）五郎をやるまいとする所、女坂では三津五郎を待つたとある樂三郎。權十郎（九代目）は其戯や伸ばつの後にはいて、本道を參り、

（番用年位）

（眞面目に）

後の坂東彦三郎の小文治や後の嵐七の中彦郎や吉弁なども、それぞれ橋へ集つてゐる。中に、

13

「は芝翫も……の後に……本道……

14

後の坂東彦三郎の小文治や後の嘉七の仲蔵や吉六なども、それぞれ一機へ集つてゐる。中に、訥升（今の宗十郎の父）だけは悠然として山駕籠に乗り、それを後の鶴蔵の雁八に担がせてゐるまではさすがにをかしい。山の頂上に登りきつたところで、腰をおろして扇で右団扇を差招いてゐるのは小團次。その後ろに臺帳を持つて控えてゐるのが後の默阿弥河竹新七。女形は菊次郎、その隣りの肌ぬぎが芝翫。河竹の左が彦三郎。甚だ降りが続れて、又亀三郎でも下り坂に向

15

6

てゐる。

明治以前までは、九蔵も此競争におくれを取るまいとして、随分努力したに相違ない。ところが彼れの師でもあり、力綱でもあつたらしい小團次は此世を去る。[illegible]は、めつきり抜擢する。それに[illegible]見用人気が出かない。はおかしい程済えて来たが、勤めに色気が無くて淋しいのが人気の湧かない理由であつたらしい。四十八歳には「近頃めつきり巧者になり、何役も評判

6

よく、おとなしい大物になられます、惜しい餘りさつぱりして艶のないのが癖。

とある。

此艶のなさが[illegible]つまり……

16

よく、おひし大物になられます、併し餘
りさつぱりで艶のないのが癖でも
とある。此艶のなさと過ぎる粉點がつまり
錦絵として外れてゐたんだりに長らく紡星
せしめた原因であつたらうが、私見に於
ける錦絵の技藝生活としても、氣の毒ながら、あま
り祝かなかつたのではなかつたか。それに甚だ今
の宗十郎の父の先代助高屋などと一座した時
の外は、いつも、お山はたかだか大三郎か、其
答か、いつもはかう、第十郎かにとどまつてゐる。

17

卷頭は、時藏の顔繪が、浅尾宗十郎だとの
役者であつたらうで、後代の一座は一體に、
しがらみかつたの。米十郎は後には明治の富
十郎あとまで劇通に褒め上げられた故實調
の前身なのだが、さうして其時たつて名人
小團次に何等かれたらういふ由緒はたけの器
用さと立派に發揮してゐたとはいへないのだ
が、何分にもあらゆる外觀がかつた。主として錦
繪を標準に劇を觀賞してゐる私なぞの子供
心には、何だか、いやアな顔の女形だと思はれて、そ

れが為に、劇の感興も殺がれることが多かつ
た。梅幸菊五郎の顔だちで隣想してゐる富
が、先づ第一流の減でもあり、尾上豊の鋤
画とは雲泥の、白縫の雷岡冬次郎や浪七
まり繪なぞの顔作もしやれつた。たから

私が為に、別の感想を教かれ、こゝが多かった。

横幸五郎

が、その第一は、顔だちで、隙想してゐる田舎者三郎やすつ減であり、鬼戸典の柳

面とは雲泥の白縫の雪国名浪部や浪七

特に隙なる顔付きもつたりたから、

後に彼の中央劇壇の一人として頼り

に値せられる名お山の隈は

意外に感じて、近眼鏡の奥より食入に拭

取つて、様を正して見直さうとすれば程に

それほどに初時の性格が彼には不利な

同情ある観察

印象を私の心に刻してゐる。さしあたりで、

彼れに関する其頃の批評は、多少追憶し得られる

つもこゝに記載するだけの價値はないと思ふ

から、一二つには、此追憶談が、もう一年に亜ん

とせんとして、やはり九月九日になつて来たから、

追憶と打上げにして、稿のお終りを「淋れ」と

「殺」とに発する總追憶を話す。

急ぐこ

とにしよう。

二十六、

秋刈のブラッディー・シーン

西洋と日本とでは、政治宗教、風俗、習慣、

評論やら

その他、種々の點から觀て、ふまでもなく、

なる違例だと

なお注意すべき異同があるが、私は主として

別趣味の上から觀て、さうした不思議と思つ

てゐることがある。これは舞台上に於ける、或

其他、種々の點から觀て、いふまでもなく、私は主として深刻味の上から觀て、むしろ不思議に思つてゐることがある。それは舞台上に於ける或寫實味に關してゞある。

西洋人の趣味性も、例の美術方面に、後期印象派だの何だのといふ破壊的な自由派が競ひ起つて、旧來の傳統を殆ど無視してしまつたと同時に、東洋、殊に支那、日本との交渉が著しく頻出になつて、前例の無い程廣に、東洋的・異國趣

味が日常生活にまで浸潤するやうになつた今日に於ては、もう決して、物質的だとか、表象的だとか、現實的だとかといふ單純な總稱で以て目標することはむづかしくなつてゐるが、十九世紀の前半頃までは、少くとも吾々日本人のそれに比べては、何かに附けて、現實味の勝つたものであつたと共に、表象でも細緻でも深刻でもあやふやに解せられてゐる。過去の大美術に現れた彼等の趣味性は、さう批評されても仕方がない。又、衣食住其他の誕因とは思はれなかつた。

日常生活が現示又は暗示する所によつても西洋人の嗜好は吾々のに比べて、遙かに寫實的であり、重厚的、濃密的であり、内面的であることを思はせる。

それだけに、不思議に只一つ、深刻の上

日常生活が現示又は暗示する所によつても西洋人の場合は吾々に比べて遥かに實用的であり、重厚的（骨）（今尚）濃密的であつて、陶冶的であることを思はせる。それだけに不思議にも只一つ別の上舞台の上だけには（それが折々）全くになつてゐるといつてもよい。もつとも別としても最近世には同じく激しい變化があつたから私の為に誤るのはやはり十九世紀前半頃までのと擬準にしてゐるのだと思つて貰ひたいが假に彼方の別の代表として例の和獵の古劇や羅馬のそれや陳つて中古の宗教劇や伊太利の大陸式の喜劇や十七世紀の西班牙英吉利のいはゆる劇や清教徒に陳つて佛英、独、伊等の十八世紀の劇を取つてそれらを彩色伝の渾論期たる文化、文政、其後天保期の安政、文久、元治までの我劇に比べて見れとするの人生觀等の深刻とか心理的表現の運命とかいふ點だけを如く別として（性格描寫の細緻とか）見てもそれが濃密でもあらうのどちらが複雑であらうか

[illegible]を中心とした[illegible]の英国劇は前後朝

に類例のない放縦と極のない夢の劇たと佛の二人は呆れ果てて評したが新しい我国北や五郎や如に最早阿弥沢助らの位と見せたら文学通に[illegible]的な五色眼鏡のやうな作品と

[illegible]を中心とした[illegible]エリザ[illegible]の英国劇は前後朝

に類例のない放縦と極めて夢幻劇たる傳奇的な一大叙事詩である。我国北斗七星や如く輝く文学史上に燦然たる阿弥以前の作と見せるこの時代的な五色眼鏡のやうな作品である。

でも、わたくしの知る限りでは複雑さとあるとさとに於て、我国最初期の叙事伝に匹敵すべき劇はこの外の何にもない。唯に作意（脚色）、構成がさうであるばかりでなく、それを舞台に上せた上での技巧、科白、表情の濃密さ、細緻さに富むすぐれた文、研鑽、傳統が果して

全て彼方のこの劇壇に成立つてゐるかどうか？　彼等伝の事実は唯劇であり、夢幻劇である。

随って叙事伝俳優の技巧、表情に濃密や細緻は概し心理的濃密に欠如したりよりは技巧本位から情調本位から愛したのである。

のが時に、また或特殊な場合だけには、それらが、なくとも普通の西洋劇に於ては決して用ゐる。能はざる程度の極めて細緻な濃密な濃密味を発揮してゐる。

就中、そのエロチック・シーンとブラッディー・シーンとに於て、極度に達してゐるのを、若しも我文藝の進化の事実を理解しないで、見たならば、殊に

年

明瞭する。能はざる程度の小さい細微な、懷疑な寫實味を發揮してゐる。

年

敎牛、それが五十歩シーンとブラッディー・シーンとに於て、極度に達してゐるのを、若しも我文藝の進化の事実を理解しないでみて觀たならば、殊に外国人が觀たならば、何と評するだらうか。我文藝の高相の外国に知られてゐないのを慨歎する人達に、若し準備的知識を與へないでいて、それを觀取せしめたなら、「嗚呼かゝる排日の宣傳になりさうな驚倒な文藝を觀せてあるなんて好い事をしてくれた！」と言はなくらいなら、今現に帝劇や歌舞伎で

（で濟む）

年

上演する劇に、幕毎に敎傷が有つたり、腹切が有つたりする作意は珍らしくないのだが、それを大和北の哀酷劇や點阿弥の悲惨劇に比べれば、生粋のまるで別物だ。自らの悲惨劇に比べれば、生粋の相違である。

（彼の）

（ニヒリスト・ラビデ）

西班牙の亞剌伯の流のあきらめ中古の「ミステリー」や「剌」の慘劇なる高雅味なる、牡時の芳年が連れた極彩色の貳拾八秀画に對する十六世紀式の粗製銅版画の味だとしてよい程に

（彼の）

（程）

於ける敎傷を寫實化することにかけては、言はれ、因縁があつて、劇は實に、古今独

（に）

（位）

（といふ）

なる寫實味なる彼の極彩色の「貳拾八秀回」に對する十六世紀或の牡時の芳年が連想する版畫の味とを程度に於とするは

於ける殺傷を寫實化することにかけては謂はれ、因緣があつて、劇は實に古今独歩であるからである。

けれども現に行はれてゐる旧劇の流布本は或は改作といつてよいほどにまで削除されたものであつて、まして上演される場合には更に又それが一層稀薄化される習ひだからあそらく明治に生れた觀劇者では、五十年前の舞台の面影は想像し得られなくなつてもあらう。

諸言中に一寸言つておいたが、私は地方に居たため、もつと中央者都

の少くも大劇場でも禁止されてゐる或種のシーンをさへも、隨分ちんだんに觀ることを得た。甚だしくセンセーショナルであるばかりに、それらは強い印象となつて殺つた。

最も早く觀たのでは、「鬼山九郎」の「切られ與三郎」だつの「鬼山」の「切られ與三郎」だつの中の磔だつの、權三權八の二人磔だつの有村治左衛門の立腹だつのは、今でも鮮かに目に見える。

今日では全く使はないが、昔は、すべて殺傷の場では、蘇芳汁をそれぞれ、驚く使つたものである。

さて、いよ〳〵終命

するまでのディテールの長くあくどかつたこと！

すべて殺傷の場では蘇芳汁をそれぞれ
「黙」使ったものである。
さて、いよいよ絶命

するまでのディテールの長くあくどかったこと！
其時分の、草紙其他で馴れ切って、
文藝に現れる殺傷はかくあるべきもの
と豫想してゐた神經なんぞこそ
の修酷を平氣で觀てゐられたのだが、
今なら、けっして馴れまいで、
なるべく、逃げ出すであらう。
私は當年の
しろ快な印象を、今度にくだいて叙寫す
る。
一瓦
（注意）
物を言って
物語
（注意）
寶樹の舞

と想像して、其他を類推してください。
（注意）
殺傷の類
とかくして、我國古の同胞はそんな修酷な、
殺傷
と思はれないほど、殺傷を樂しんでゐた。
殺忍野蠻
刺せ！
一刀も、昔は、一日十三時間の刑場中に
大抵、
最も修酷な
三四五回、
最も甚だしい
三回は必ず
あったのに、
主な觀どころ
狂って觀てゐたか？
殘忍な性が我民族に
固有されてゐるのか？
少くも外国人が觀たら
ば、さう笑ひさうなのは、此同じ趣味、同じ
傾向、同じ意匠、同じ陶色が我邊古の最も發

達した文藝と称せられる文化文政度の小說
と一貫してゐる。
外国にも陰分殘酷な事を細

年ば、さう見ひさうなのは、此同じ郷味、同じ傾向、同じ意匠、同じ脚色が我過去の最も長

年

発達せる文藝と称せられる文化、文政度の小説を一貫してゐる。外面にも陰分殘酷事を細細作もあるが、我々の度の小説のやうに、強と俗章に人を斬ることを、大根をかるやうに、此多情多感、傳感、情感、さうにみんなりんに書流してゐるのはないこれは、一点に中を撞きずとも、単なる紙なる諧み事なりの、あの柳編さう観ばば歴史として語り、撥立てられる。

どうして我過去の同胞はあんな無慚なさうごたらしい話や動や

年

少くとも無意識的潜在性の作用であるべきを、

慣傳の知らしめた

別を知んだのであらう。さうしてこれが明治の末年迄まで尚依然として續いてゐれと況の末年迄まで、これは我民族性の未来いつてよい、何とんでもあるまいか。

私は目下式書録のために五報、南北以下の聊斎の傳説、とうと選集そのうちが、それらはづれたこと昔から言はれてゐる前の聊斎として、廣

年

足る

ものゝみである。

武

人達は、徳川の我文化を外国に対して宣傳を為得するが、一國の文化の最も行届いた結晶だ、反映即ち鏡だ、すべての必要

く理解紹介する意味と意義とのと是等旧聊斎を見改めることがあるであ

文化

33

昔から言はれてゐる
劇の脚本として
廣

34

く紹介するのに適當したものと是
等旧脚本を見做すことがあるのであ
らうか。彼等は果して我邦の文化
を、民族性を正しく反映し得て
ゐる鏡だと言へるであらうか。

二十七　エロチック・シーンに就いて（其二）

我邦の作に取扱はれた殺傷が外國の劇に類例
のない程度に残酷であつたことは、前に言つた
通りであるが、それと同時に、維新前後の
劇に於けるエロチック・シーンの大概が、到底今日

35

では再演を許さない程度に露骨
であり、其表現が寫生的と
いつてよい程に細密であつた時は、一體どういふわけ
だらうか。我日常の生活を顧みると其
他とも、すべて外國人のそれよりも淡泊であ
るとか思はれないのに、劇だけが、其脚色
から形式から、何もかも、妙に官能的で
わづらはしく、殺傷と性慾とに偏す
る部分が、多いのはつまりあまり
なのはどういふわけだらう。

少年時に觀た「　」の場の無氣味な印象は
今も尚目に残つてはゐるが、

わつらはく、
部屋が、
るのはどうしてわけだろう？

秋中、鶴と性慾とに溺す
ることは、やはつこゝあま

少年時に觀た「新つの塔つ無礼な白鳥」は
今も尚目に殘つてはゐるが、編輯者が
を御入れ、それを詳細に說明するに代つて私
は、エロチシズムに輝くは尚更同樣の
便宜を利用せざるを得ない。
思ふ。
最初の心理アナリスト
中村武羅夫氏らに言はせると、お

よそ文藝の中に現れた最高の部
分は、意識的に立つて、意識的
に考へられる。エロチシズムは、必ずしもあ
るものである。それは、
らゆる性慾が密接に關係してゐる部分の
みをいつてはゐない。田野山川風物の美を
歌つた詩歌にも、飛鳥、騎馬、水泳等
を歌つた詩の中にも、或は立
き毋を追慕した詩の中にも、實の妹を無二の心友と
呼び、かはりする同胞を詩さうとする孤

と大抵無言詩ではあるが、同じく エロ だ！

年

き母と追慕し、寡婦の妹を無二の心友と
咲かせようする間にも、句詩さらにあるは、子孫

年

ど大抵無意識ではあるが、同じく工にたり、
モーナーが働いてあるのを、ということになる。
又、ゆんで彫刻を教育や淫蕩と叙事
することをあるものは、畢竟は其作者に内誘
サディスト風の倫癖のある証拠であり、又、好
んで賞翫される詩や隠語を解かしたり
り、妙に入組んだ探偵話なども執着
りするのは、マゾキズムの意識的しるし
(多くは)無意識的に、自虐的ということになる。
さて此理から推して、あ思ひ

年

つて傳説を地獄の苦と書いたガンテには、
自分のサディズムの喰因があつたらう
アラン・ポーにはサディズムもマゾキズム
も共に著しく働いてゐたとすつてある。
カウパーやハーン(八雲)は、
か、亡き母を、母として以上に慕つてゐたもう
であり、バーンやワーズワースにも
其妹に対する常以上の愛があつたら
ことになる。
年だとか、今は、外国人中にも、とか
最近の、新奇な説には、なども、一も二もなく

雷同し盲聾する者が少ない勢
いで、なるべく心理的意剖論が、別の直輸入に

年

其妹に對する常
だと、はらとしてある。
く最近の、新奇な話
の上の夢があつた
今は
外国人の手で、又は、醫師の手で、
升五人中に、とか
たとへば、一も二もなく

年

雷同し盛慧
たゝ、からく心理解
過去の小説や自創
せられ
まいもつでもなし
のは、吾
に取つ
は少
達意な
事であ
る。
意
外國人の手で、又は、醫師の手で、
する者が少なく、
解剖が
例の直輸入に
たゝ知
此興味深
大分
詳しく
大さ
全部が極度
であ
ると
いや今現に演ぜられつゝある戯曲作家と
障礙に
試驗
判
自
擬
前は
戯曲
大部分
又は失
ハとサッパリ
からである。

年

心理解剖
作者と
作者が
性慾者
又は
ばか
非常
と推定される
連
きわめて
悪く
悪く
と見做す
又はる
観賞してゐる
区区全部が
と推測
せられ
いわけにはゆかない
あつ、
意表
陰謀
屋上に屋を架した
まるで迷路のやう
な、八重襌のやうな
迷殿のやうな
迷宮のやうな
智慧の輪のやうな
探偵
古御本の
くだらない
くどい
目まぐるしい
脚色や
を読ませたら何といつたらよいか
次に
ヒンセンヨウ
の物惜的な
興味
あくどい
ありブル
丑味な

な、八重襌のやうな智慧の輪のやうな、
迷路のやうな、探偵小説の
「やる、とい、目まぐるしい脚色や、あ
と読ませたら何といふ
の、次に

の綸情的な、興味な、あくどいこと
かい、感傷的な、殺人の場面や、更
にこれから、あの挑発的な、きはどい、
官能的な、淫靡な場面や、淫蕩
な、
か、
の場面等が、一作中に、多い時は三三場、
少い時も一場ぐらゐは必ずやはいる
込まれ、而も此三つが、傾る無
界
情調を、
西至極な、
多くは重濁的に流れ

られ、且つ大多数者にとつて、それが一日の見場
であるかぬく観賞、さ
ならば、何といふ
当時の観劇時間が十三時間の長
丈らざ
ると得なかつたのも、一つは、かゝる場面
に多く費やされたとも言ふ
ら面白さに十万、十五万と費す値ひなの
は昔の歌舞伎の味
の論外にも、隠れ野卑な、猥褻な劇
はあつた。さても名誉の古代喜劇
アセンス衰頽以後の新流行のそれ
は、其道に形の陶冶をかから想像した
でも、ゴ芳に字屋に堪へられ

年

はあつた。さても名作の希臘の古代喜劇と
アセンス衰頽以後の新流派のそれとかき

年

は、其直に形の陪徊すをから想像した
たけでも、大分に軍猥に陥りつゝあつた
ことが分るのだが、それが、陳つて羅馬帝
政時代となり、テレンスやプローメスの死後となつては
実に一層露骨な、野卑なものとなつた
らしいけれども其頃の劇は、内容も
形式も尚甚だ間素で、其猥雑な味
も少はずらしい。或は又、単純で旧大阪(歌式)であ
のみき、或はマコーレーが言を極めて罵つて、

年

其外題を口にすることすら憚るつた英
の夏碎期の喜劇も、もつは、つ最盛まで
の支那の世劇のみき、これらは軍猥な
劇の例として、かなりよりたが、
ところは、此らも第一と第三とは、やは
り昔の大阪式に近いもので、あつたと思はる
審感を消除すが、あつたらと思はる
し、又第二のは、さすがに時の上中流に迄も歓
また劇だけに、けども其表面には偽善外
被や禮義假面がかぶせてあるかさうでな
くば、其表現が多少露骨的、暗示的である
かして、よし軍猥さは、つまるところ、同一であ
ろう

年

せた刺だけに、仕事も其表面には偽善外
被や禮儀、假面がかぶせてあるかさうでな

年

くば、其表現しが多サ言葉的、暗示的である
かしてよし平面さは、つまるところ同一であ
つても、我邪なる乳で露骨を極めたる
に比べると、西鶴の或作に對する春水の或作
ほどに異なつてゐるとしてゐるだらうとに
かく、脚本で讀んだところでは、我別ほど
には、西鶴ほどは、ないこと、十九世紀
から二十世紀の現在へ掛けては、西洋の別個
も、ある通りの大勢となつて結果、種
々主張の下に、隨分思ひ切つた作が書

年

かれ、又適せられて、するやうになつたが
甚だしく、性慾問題を取扱つたものとし
ては、一等零番であるが、如何にしてゐる
テキドの作とても、我邪に點で可なり
如何に比べ、ビスマルク等
の或作に比べ、
輝かしい、
様である。
もつとも、立入つて例
外は、賢者の或指導を或様の
ナーアに比べるやうなものである。
も、違つ、童子の表現の目
的も、違つ、方も、童子の
も、例の心理的、サイコロジカル
意、研究者風に、背に眼光

性格
概要
ロジロンソーやにメウ
を解せ、こ、は、
や、こ、天才を持て病理的に診断する

たーアに比…

何も違つては、形式も方法も違つてゐると

も、例の心理解剖学者風に紙背に眼光

48 筆

を徹せしめて、若しくはロシアのノルダウ

の如くに天才を病理的に診断する

とするかは、或は外国の劇の性的モチーフを

するかも知れない。例へば彼のワグナーの

楽劇の或物のごとき、流れの少しも…性

慾的モチーフの強烈なのに辟易しながら

しい口氣で話して…

に…聴覚を主

とするから…ワグナーの大きを…自然

便宜があつてでもあらう。とにかく、私の知る限りでは、文化以後、維新前の歌舞伎のやうなものは、今までの公演された外国の劇の中にはまだ嘗て類例がなかつたと思はれる。

（大正九年十月廿日稿）

下7 6

15

正誤

前号の叙事に就いて、箱根黙庵君からわざわざ申越された注意があつた。それは次のやうである。

「どうでもいゝ事ながら△は

849 筆

△坂東太郎は名人小団次の弟子となる前の名は、荒三津之助、後ち四代目市川小団次の門に入つて市川梅蔵、中村翫雀となり、文久二年守田座へ再び下りて、元治元年小団次の門弟と相成り、改名小団次死…

坂東太郎は、[illegible]名人小国次郎の弟子となる前の名は、筑三津之助、後ち四代目[illegible]

[illegible]の門を入り、中村梅蔵と改め、文久二年、中田[illegible]に入門し、元治元年、国次の門弟となり、改名小国次郎と名乗る。[illegible]太郎と改める。

後、先代梅蔵を名乗る。

国次の没後は慶応三年四月、太郎と改め、

はその年の八月、名を[illegible]の日上み梅花と改める。

が、如何[illegible]梅花は玉助

の養子で始め[illegible]形[illegible]梅蔵は二枚目[illegible]

[illegible]の最近没した大坂の老優[illegible]三郎はこの梅蔵の門人で、[illegible]梅蔵と云った。

興行場は芝新[illegible]の弟子となったが、この芝蔵は今の崖右衛門の実父が芝蔵と名乗[illegible]頃[illegible]

[illegible]梅幸は[illegible]

[illegible]

6

太郎の口上に、梅花とあったとは小生

玉助の隠事に見えるようだが、[illegible]

君のお説によって考えて見ると、こ

れは玉助が草書で書いた「蔵」の字

を花と見誤ったらしいであらう。

芝蔵の事は私にはまだどうも判断が

[illegible]

[illegible]のは、明治[illegible]年に、別

に中村芝雀と云う大阪の俳優が巻頭

となり、中村宗十郎を巻軸にして、名

古屋の若宮の市座へ来てる。私は

に中村芝雀と、大阪の俳優が巻頭となり、中村宗十郎を巻軸にして、名古屋の若宮の市廣座に来てゐる。私は

イヤッシリ
Page 36 に其事を述べて、芝雀は先代雀右衛門だと註してゐた。それと芝翫とは全く別人であることは慥かである。それに、芝翫は此年の末までも同じ名を名乗つてゐる。芝雀は先代雀右衛門の其頃の名でないとなれば、私の記憶ちがひだとしてもならぬ。尚大方の是正を俟つ。

名古屋は地名のせいで、前にもいつた通り、俳優の名前なども、都會とは、違つ

てゐる。訪ずれが助高屋高助と早くから名乗つたり、時彩が、明治初年に歌紫でゐたりする。古くは、弘化元年には、尾上多見蔵が大川八郎で橋所に来てゐ、尾上菊五郎も大川橋蔵と名乗つて同所に来た。又七世團十郎も成田屋七左衛門の事名で若宮に来てゐる。翌二年には嘉永元年に高麗屋幸四郎と名乗つて来てゐる。時勢を憚つてゐる事であつたらしいが、実則の事が多い地方の例は、俳優を絵にして困る。

52年

又七世関十郎の成田屋七
左衛門の事名で若衆まで勤める。
二年には高麗屋幸四郎と名乗って来
る。時勢を悟ってる事であ
ったらしいが、義則の事が多い世界の
ことか

53年

6

例は、紙らって困る。

五十年前に観た歌舞伎の追憶　道造先生原稿

本間文庫
文庫 14
A138

五十年前に観た歌舞伎の追憶

道産先生原稿

本間文庫
文庫14
A138